

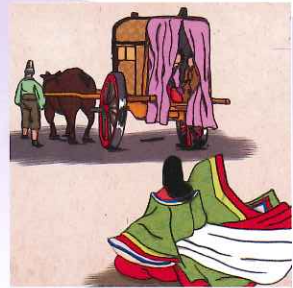
みちのくを代表する歌枕「武隈の松」(二木の松)はどんな松?

初代の松は記録がないので、いつ誰が植えたのか分からない。

2代目の松を植える 950年頃まで

※2 陸奥守 藤原元善が植えましたが、後に野火で焼けてしまいました。もともとの「武隈の松」は、黒松と赤松の2株が並ぶ相生の松だったといわれています。

3代目の松を植える



4代目の松を植える

後に陸奥守が橋の建材にするため切ってしまいました。

1005年頃

源氏物語が書かれる

紫式部の「源氏物語」では、光源氏が「武隈の松」を歌に詠んでいます(19帖 薄雲)。この時の「松」も、2株が並ぶ相生の松とされています。

能因が訪れる

能因法師は、2度目に「松」を見に来たとき跡形も無かったと歌に詠んでいます。言い伝えでは、能因はたまたま出会った竹馬に乗った童(竹駒明神の化身)に「武隈の松」まで案内してもらい、さらに歌の奥儀まで教わりました。それに感謝して草の庵を結び四方に出かけ、歌道に精進しました。そのときの庵が後に竹駒神社の別当寺宝窟山竹駒寺になったとされています。(左写真:竹駒神社蔵)



1025年頃



西行が訪れる

西行法師は能因の跡を追って奥州へと旅に出ました。松が無くとも跡だけでも見たいと、この「松」を訪れて歌を詠みました。

1145年頃

6代目の松を植える

1861年に烈風のため倒れました。

二木塚・名月塚の建立

竹駒神社境内にある句碑で、芭蕉の百年忌に建てられたと推定されています。



其の壹 陸奥のシンボル

950年頃には、すでに「武隈の松」は広く知られ、都人にとって※3「陸奥国」の象徴でした。陸奥守として赴任する人がいれば、周りの人は饒別(ニギハヤヒ)に「武隈の松」を歌に詠みました。名取に墓がある実方中将(藤原実方)も陸奥守に任じられた際、親しい友人から「武隈の松」を詠んだ歌を贈られています。

其の貳 いつでも見られるとは限らない

松は千年生き、常緑不変とされますが、「武隈の松」はしばしば姿を消したことが分かっています。この「松」は植え継がれるところに特徴があったといえます。

其の参 他にもあった?

現在の鶴ヶ崎城址から、法常寺へ入る道にかけては、かつて鼻輪崎と呼ばれる小丘がありました。そこには「鼻輪の松」がありましたが、形が似ているためか、「武隈の松」としばしば混同されました。こちらも代々植え継がれましたが、1889年頃に強風で倒されてからは姿を消したままとなっています。

其の四 無くても詠む

藤原清輔の「奥儀抄」には、「(松は)なくとも(歌を)よむべし」と書かれています。

新しく陸奥守が赴任する時には、国府の役人たちが「武隈の松」の前で出迎えました。陸奥守は、そこで歌を詠むのが慣習となっていて、松が無い場合は、松の枝を立てて歌を詠みました。陸奥守にとってはまるでテストされているような気さえたでしょう。

「武隈の松」が陸奥守によって植え継がれることが多かったのは、そのような慣習も影響したのかもしれない。



5代目の松を植える

1689年

芭蕉が訪れる

能因や西行を敬愛する芭蕉は彼らの跡を追って旅に出ます。1株2股の「松」を見て感激の一句を詠みました。この後たくさんの人が芭蕉の跡を追って訪れるようになります。



二木の松史跡公園の開園

奥の細道紀行300年を記念し、ふるさと創生事業で整備を進めた「二木の松史跡公園」が開園しました。

園内には、二木松碑と句碑があります。



芭蕉像と句碑の建立



(JR岩沼駅前広場内)



- 1 ふるさと展示室
JR岩沼駅から徒歩7分
岩沼市民図書館2階
- 2 二木の松史跡公園
JR岩沼駅から徒歩10分
- 3 芭蕉像と句碑
JR岩沼駅前広場内

※1 歌枕:和歌に多く詠み込まれた名所・旧跡のこと。
 ※2 陸奥守:国府のあった多賀城に派遣された陸奥国を統括する長官のこと。江戸時代には、仙台藩主に与えられるのが慣例となった。
 ※3 陸奥国:現在の東北地方東部(福島、宮城、岩手、青森県と秋田県の一部)。

『おくのほそ道』と岩沼



～みちのくのシンボルは武隈にあり!～

(武隈は岩沼の古称)

元禄2年(1689年)3月27日(新暦5月16日)に江戸の深川(現・東京都江東区)を曾良とともに出発した芭蕉は、東北・北陸の歌枕(名所・旧跡)などを巡り、美濃の大垣(現・岐阜県大垣市)まで、約5カ月間2,400kmにわたる旅を終えました。その旅の様子を綴ったのが『おくのほそ道』。

芭蕉が岩沼を訪れたのは5月4日(新暦6月20日)でした。



武隈の松と芭蕉、曾良(『三月越集』)



宿場町の岩沼(『仙台領奥州街道絵図』・仙台市博物館蔵)

『おくのほそ道』(「武隈の松」の章段の現代語訳)

岩沼宿

武隈の松の素晴らしさには、目のさめるような思いがする。根は生えざわから二本に分かれて、古歌に詠まれた昔の姿を失っていないと知られた。それにつけても何より先に、この松のことを詠んだ能因法師のことが思い出される。その昔、陸奥守に任命されて都から下った人が、この木を伐って名取川の橋杭になさったことなどがあつたからであろうか、能因法師は再度の陸奥下向の節、「松はこのたび跡もなし」とは詠み残している。代々、あるいは伐り、あるいは植え継ぎなどしたと話に聞いているのに、今また千歳を経たかと思われる端麗な形をそなえて、いかにも見事な松の風致であつた。

武隈の松見せ申せ遅桜

(陸奥の遅桜よ、わが師がおもむかれたら、武隈の松をもお目にかけるように。)

という句を、拳白という者が饞別に贈ってくれたので、それに応える意味で、

桜より松は二木を三月越し

(江戸発足以来三月に及んで、君がせっかくあつらえてくれた遅桜の候は過ぎってしまった。しかし、桜よりも何よりも、武隈の松こそは、古歌に詠まれた二木の見事な姿を、三月ごしに、たしかにこの眼で見ることができたことだ。)

『曾良随行日記』

白石に宿す。

(五月)四日 雨少し止む。辰ノ尅(午前6時20分頃)、白石を立つ。折々日の光を見る。岩沼入口の左の方に、竹駒明神というあり。その別当の寺(宝窟山竹駒寺)の後ろに武隈の松あり。竹垣をしてあり。その辺、待やしきなり。古市源七殿(岩沼領主・古内源吉のこと)の住所なり。

角川文庫『新版おくのほそ道』より
※一部加筆修正しました。

芭蕉が訪れた頃の岩沼は?

宿場町 奥州街道と江戸浜街道が合流する交通の要所であったため、参勤交代などで大名や幕府の役人をはじめ、商人や一般の旅行者なども利用した大きな宿場町でした。

城下町 岩沼には岩沼城(江戸時代は岩沼要害と呼ばれた。要害とは城に次ぐ拜領施設)があり、岩沼領主の屋敷がありました。当時の領主は、11歳の古内源吉。芭蕉と曾良は、古には岩沼に奥州官舎があつたと思つていたので、家臣の屋敷が建ち並ぶ様子にその面影を感じていたのかもしれない。

訪れた人の楽しみは... 奥州街道の江戸-仙台間で最も海に近い宿場町なので、旅人は魚料理を期待して岩沼を訪れました。名物は焼き鱈。阿武隈川で獲れる鮭も有名で、領主の古内氏は京都の公家にも献上していました。他に名物として、鴨、菱の実、どじょうがあり、鴨は仙台藩主に毎年献上されました。

門前町 竹駒明神は多くの参拝客が訪れて栄えていました。神の使いがきつねということもあり、岩沼の人々は、きつねをととても畏れ敬ったそうです。

馬市の町 江戸時代初期には竹駒明神の境内で馬市が年間100日間も開催されていました。全国から馬の売買を行う博労や商人が集まり、境内だけではさばききれず、町中のあちこちで売り買いが行われ、大変混雑しました。しかし、寛文元年(1661年)からは、藩主の命令で半分の50日に減らされました。

江戸時代の街並みを模型で再現

(岩沼市民図書館2階 ふるさと展示室)

